



JR東労組仙台

East Japan Railway Workers' Union SENDAI
東日本旅客鉄道労働組合仙台地方本部

発行者:佐々木克之

編集:情宣部

2024年3月2日 No.51 東北三地本HP



申15号 2024年度賃金引上げ等に関する申し入れ 申16号 2024年度夏季手当に関する申し入れ

第1回交渉①
2/29 開催

東労組趣旨説明

◆申12号交渉の6点の確認事項を踏まえて真摯な議論を冒頭求める。

<申12号交渉で確認した「6つの確認事項」>

- ①春闘と夏季手当の位置づけと考えは変わらないこと
- ②性質が異なるベースアップ、定期昇給、夏季手当を同時議論することにより、ベースアップや夏季手当を抑えることにはならないこと
- ③期末手当の安定的支給ベースを定めて、今後の労使議論に持ち込まないこと
- ④労使議論の回数や時間を削減することが目的ではないこと
- ⑤より労使の議論が重要となってくること
- ⑥労使議論が成熟できる時間を確保して、労使の議論をし尽くすこと

◆昨年の春闘では3年ぶりにベアが実施されたが、私たちの要求から大きく乖離した回答であった。21春闘における定期昇給カット分への支給が実施されないことで生涯賃金は減額、実質賃金も目減りしたままだ。厳しさを増す組合員・社員の生活実感・労働実感、そして過去に経験のない離職の現実と危機感を労使で一致させることが課題だ。

◆職場は、重大化する事故・事象や、激甚化・頻発化する災害への対応、各種施策や諸課題の解決に向け、職場現実を踏まえて向き合い続けている。その職場の日々のたゆまぬ努力の結果、昨年とは比にならないほど業績が大幅に回復し、通期の業績予想も上方修正されている。この組合員・社員の努力に報いる経営姿勢を要求満額の回答で示すべきだ。

◆生活実感は、上昇し続けていた物価が高止まり長期化の様相を呈し、物価上昇に賃金が追い付かない実態が続き、生活は向上するどころか厳しさが増している。

◆労働実感は、施策の目的と乖離した職場実態にある、要員不足の中で安全確保を前提に、技術継承・人材育成の課題解消に向けた努力を強いられているという声あげられている。そのような中「融合と連携」などにより多能化が進み、労働密度が高まり続け一人当たりの売り上げは過去最高になり「過去最高の働き度に賃金が追い付いていない」状況で、乖離が大きくなっているために不満や不安の声が後を絶たない。この現実を会社は直視し真摯に向き合う必要がある。

◆将来を不安視し、若手を中心に離職者が絶えず人材流出が止まらない現実もある。要員不足の現実が未だに改善されていない。JR 東日本グループ全体の「待たなしの課題」である。

◆生活実感や労働実感は厳しさを増す中、業績は大幅に回復し、業績予想も上方修正していることや、実質賃金の低下や物価高が続く中、すでに満額回答をする企業もある中の今交渉は期待も大きく、JR 東日本グループ内の組合員・社員も含めて、内外からも注目されている。

◆会社の持続的成長と地域の発展に向けた飛躍を実現するには、組合員・社員のモチベーション向上が必須であり、労働条件の最たる賃金で応えるべきである！